

して上昇を來すに歸因す故に此際には室内の通風に注意し薄著せしむる時は直ちに平温に復するものなり。

第四節 初生児の體重

初生児の體重は分娩の翌日より毎日必ず減少す之れを初生児の初期體重減少と稱す、其減少は分娩後第二乃至三日目に於て最著明に、四五日目迄持續し其れより漸次増量し來り凡そ七日乃至十日目には分娩直後の體重に達す。其恢復する時期は初生児の發育如何により大差あり、健康成熟兒にして看護宜しきを得たる者は既に一週間以内にして分娩直後の體重に恢復し、反之不良なる看護を弱兒早産兒等にては其恢復遅延し三、四週後或は其以後にも至ることあり。初期體重減少の原因は主として全身よりの水分消失(胎糞排出、排尿、肺臓よりの呼吸中の水蒸氣、全身皮膚よりの蒸發)あるにも拘らず之れを補足するだけの榮養分の供給無きが爲めなり。初生児の體重を測定するは沐浴前に於てするを良しとす即ち其著衣と共に之れを秤量し而して豫め秤り置きたる著衣並びに附屬物(襪襪等)の目方之れを風袋と稱す

を引去りたるものが眞の體重なり。初生児の體重の測定は毎日之れを行ふ必要ならず、哺乳時との關係、排便、排尿等の如何により差異あるものなれば凡そ一週間毎に之れを行ひ且つ其重量をば體温表等に記入し置くを良しとす。嬰兒發育の良否は主として其體重の増減に因りて判斷出來得るものなれば小兒一ヶ月間に於ける體重増加率を知ること必要なり即ち其各月末に於ける體重及び増量は次表の如し。

月數	初生児體重(瓦)	一ヶ月間の増加(瓦)
分娩後	3000	
I(末)	3800	800
II(..)	4000	800
III(..)	5000	700
IV(..)	6000	700
V(..)	6600	600
VI(..)	7100	500
VII(..)	7500	400
VIII(..)	7850	350
IX(..)	8150	300
X(..)	8400	250
XI(..)	8650	250
XII(..)	8850	200

體重増加の割合は初めに多く、月數を重ねるに従ひて少なし、即ち初め三四ヶ月間は凡そ一日平均二〇乃至三〇瓦の増加を示すが其後に至りては漸次減少して滿一ヶ月

初生児の生理及び其取扱法

年を経過したる小児の體重は分娩直後に比し約二倍半となる。

第五節 初生児の排尿及び排便

初生児は分娩直後概ね蓄積せる尿を排出す、其後數時間又は時として二十四時間も放尿なし其後排尿の状況は榮養攝取の如何により差異あるも數日間其回数は一晝夜三四回又は一二回なるが乳汁攝取と共に増加し第一週末頃には一晝夜十回内外となる。

尿量は一定せざるが一回量五〇立方仙迷を越ゆることなし。

初生児の第一尿は水様透明なるが其後は僅かに溷濁することあり、之れ尿性分の一つなる尿酸が外氣の冷却に因り沈澱する爲めにして異常に非らず、時として襪襪に煉瓦色を呈する微細の顆粒物の附著して往々血液と誤認せらるゝことあり、之れも胎生時初生児の腎盂に充填せし尿酸結晶の尿と共に排出せしものして生理的現象なりとす。

人工榮養児は天然榮養児に比し排尿量多く従つて回数も亦増加す。

排便 初生児は初め胎糞を排出す(胎糞の性状に關し其全量七〇乃至九〇瓦なるが其

排出の日數は哺乳時期に關係して差異あり早く授乳すれば第三日目頃より乳汁糞便と混合したるものを排出す。

排便の回数は天然榮養児にては一日二、三回を普通とし、人工榮養児にては其れより少なし。

性状 天然榮養児の便は黄金色粘稠にして稍酸臭並びに甘味性を帶ぶ、牛乳榮養児にては前者に比し有形性即ち濃粥状にして帶黄灰色なり。

正規則に經過せし場合にも第一週目頃に糞便が綠色を呈し、粘液を混じり且つ大小不同の帶黄灰色の顆粒(之れ乳汁中の蛋白質が充分消化され)を見ることあり、此場合體重の減少なく一般状態に變化無ければ殆んど生理的と見做すべきものなれども此の如き糞便何時迄も持續し且つ悪臭を放ち又は小児一般状態に異常あるは勿論異常と知るべし。

第六節 臍帶脱落

臍帶の斷端は所定の處置により漸次乾燥萎縮して黑色膠様の性状を呈し同時に臍輪の處に於て輪狀に判然たる境界を造り後全くミイラ變性に陥り且つ其境界線周

圍の皮膚は稍發赤し一定の時期に達すれば其境界線より脱落す之れを臍帶脱落と云ふ其脱落の時期は通常分娩後五乃至八日間内とす(早熟又は虚弱児にては臍帶脱落の時期稍遅るゝを通常とす)脱落せる後には創面を造るが二三日の間に周圍より表皮増殖し來りて此部を被包して治癒し且つ陥凹して遂に臍窩を形成す而して其後は臍窩よりは分泌物等無く全く乾燥す。

若し臍輪發赤續き臍窩より分泌物あり又は膿汁を漏すことあるは其部の傳染化膿の徴候なり。

第七節 初生児黃疸

初生児の大多數は分娩後二乃至四日目より皮膚前額、鼻梁、前胸等に著し黃色を呈す。其度甚しき時は眼球角膜にも及ぶことあり之れを初生児黃疸と云ふ若し其度強からず且つ一定の時期内に消失すれば生理的現象の一つなり。

黃變は普通第二乃至三日目最強く七日間位にして消失するが其れより長く持續することもあり。

此際初生児の状態には變化無く糞便及び尿の性状も異常無きものとす若し黃疸の

度強く長く持續し初生児は哺乳量少なく且つ不絶睡眠に陥る場合は異常と見做すべきものなり黃疸の現出は一般に女児よりも男児に多く且早産児に強し。

初生児黃疸の原因に就ては未だ定説無し。

第八節 初生児の皮膚落屑及び乳房腫脹

初生児の皮膚は分娩後三四日目頃より乾燥する爲め其表皮は糠又は膜様の形となりて剝脱す之れを初生児の皮膚落屑と云ふ勿論新しく發生せる表皮によりて代償さるゝものなり其他初生児の皮膚は頗る薄弱なるを以て僅かの刺戟又は處置宜しきを得ざれば濕疹等を發生し易し。

初生児の乳房は男女の如何に拘はらず分娩後三四日目頃より腫脹して膨隆す之れ乳腺内に水様透明の液を分泌溜溜し來る爲めにして壓搾すれば排出す之れを魔乳と稱す其性状は褥婦の初乳と同様なり此變化は數週の間に漸次消褪す稀には炎症を起して化膿を來すことあり。

初生児乳腺分泌の成因に就ては未だ一定せざるも恐らく母體より胎兒に移行せし刺戟素の爲めならんと云ふ。

第九節 初生児の五官器

五官器は初生児時代には未だ充分の發達なし、眼は僅かに明暗に對して反能し、聴覺、嗅覺等は殆んど感應せず、唯稍發達せるは皮膚の觸感のみなり、初生児窒息して假死の状態を以て娩出せる際には皮膚を刺戟して(初生児假死の處)其呼吸運動を促さしむるは此理に基く。

第二項 初生児の取扱法

分娩直後に於ける初生児の處置に就きては前述せり、故に茲には其後の取扱法に就き記述すべし、蓋し初生児取扱法の要諦は(一)適度の保温(二)清潔及び(三)榮養の三點を主として注意するにあり。

第一節 初生児の沐浴及び注意

初生児は毎日一回温暖なる室内にて沐浴せしむべし、沐浴の目的は身體の清潔を計るゝ共に保温し且つ皮膚を刺戟して生活現象を良くし其發育を良好ならしめんが

爲めなり。

沐浴の回数は一、二回を普通とすれども時として二回之れを行ふことあり、但し小兒發熱三十八度以上の時は沐浴を中止すべきなり。

- 沐浴の方法は初湯の際と同様なるが此際注意すべき事項は左の如し。
- (イ)室内を密閉して温暖ならしめ隙風の入らざる様注意し、小兒の感冒に罹らぬ様注意すること。
 - (ロ)沐浴時間長からざる事及び沐浴後は大なるタオル等に包み能く皮膚を乾燥せしめ殊に臍帶斷端の水分を充分除去すべきこと(之れ臍帶脱落の時期に大に關係すればなり)。
 - (ハ)臍帶斷端を牽引し無理に早期に之れを離脱せしめぬこと。
 - (ニ)寒冷の際には著衣を豫め温め置くこと。
 - (ホ)耳内に浴湯を入れしめざる様注意すること。

第二節 臍帶斷端の處置

處置の要領は清潔を守り且つ乾燥せしむれば生理的の脱落を爲すなり、故に沐浴の際助産婦の手は充分清潔に且つ浴槽及び浴湯も清潔なるを要す、而して浴後には臍帶斷端部の水分をも充分ガーゼ又は脱脂綿にて拭取り「デルマトール」又は「アイロー」を撒布し臍帶を施すべし。

臍帶斷端脱落遅く其他臍輪の發赤著しく又は膿様分泌物を出す如き場合は異常に屬す。

臍帶脱落後四、五日間は尙前と同様の處置を施行すべきものとす。

第三節 初生児の衣服及び臥牀

著衣は寒暖に應じて適當なるものを必要とす而して著衣の目的は保温なれども餘り厚衣は却つて皮膚を薄弱にするの習慣を造り且つ身體より水分發散の障礙を起し前述の如く體溫蓄積に因る發熱を起し且つ小兒の四肢運動を妨げて有害なり(初生兒は四肢を運動し)故に成人の著衣よりも凡そ綿入一枚厚衣せしむるの程度に留むべし。

上衣は普通木綿の綿入れとなし、下衣は綿フランネルの如きをよしとす、肌著は通常地悪の晒木綿の類にして白地を最良とす、染色素は時として粗悪のものありて皮膚を刺戟し發疹を生ずることあればなり。

襪は地悪の木綿又はフランネルの如きものにして地厚のもの又は硬きものは皮膚を刺戟し小兒の安眠を妨ぐ且つ清潔にして乾燥せるものを使用すべし、餘り厚く

襪襪を用ふる日本の習慣は下肢の運動を妨げ甚だ害あり故に襪襪は薄きものにて毎毎取替ふるを理想とす、襪襪「カバー」と稱し護謨布又は防水布にて造りたるものあれども水分發散を妨げて理想的ならず。

臥牀は特別に造られたる寢臺あらば之れに臥せしむるをよしとすれども通常普通の敷蒲團の上に臥せしめ、掛蒲團は室内溫度により取捨するは勿論なり、通常夏季は晝間掛蒲團を要せず、夜間は薄きものを用ふべし、冬季は成るべく輕きもの二枚とし且つ側方又は足部の方に湯婆を入るべし。(湯婆の爲めに火傷を起)

初生児の間に搖籃等にて動搖することは宜しからず、又我邦の一部北陸、東北地方にて使用する「つぶら」と稱する藁製の籠内に入れ置く習慣も生活上已むを得ざる手段には相違無きも改むべき悪習なり。

第四節 初生児の起臥

健康なる初生児は哺乳時に至れば覺醒啼泣し他は靜かなる睡眠を取るものなり。臥位は側臥をよしとす、之れ小兒の胃の形狀が容易に吐乳する様に成り居るものなれば其際吐出物が喉頭氣管等に流入するを防ぐに利益あればなり、又小兒は常に成

るべく獨臥せしめ母と同衾せしむべからず殊に睡り易き母親にては堅く之れを禁すべし之れ乳房其他を以て小児の鼻口を壓迫し其呼吸を閉止し遂に窒息せしむるの恐れあればなり歐米人の如く絶えず小児を獨臥せしむるの良習慣は母兒兩者の爲めに確かに有益なりとす。

嬰兒は分娩後第三週に至れば氣候温暖の際なれば暫時戶外に出すも妨げなし風雨寒天の際には斷じて不可なり。

小児を抱くことは宜しきも之れを背に負ふことは害あり殊に紐を以て之れを背に擔ふ如きは小児の胸腹及び四肢を壓迫して其發育健康を害するものとす。

第五節 兩便の通利及び清潔法

前述の如く初生児一晝夜後に至りても尙排尿無き時は能く陰部を検査し若し不明なる時は醫師の診察を乞はしむべし。

排便の状況は前述せるが如く若し初生児一日中排便なければ灌腸を施すべし(灌腸法は下巻に)若し最初より排便無ければ之れ鎖肛と稱し肛門の缺如する畸形なれば直ちに醫師に受診せしめ適當なる處置を行ふべきなり。

排便排尿後の處置宜しきを得ざれば小児の外陰部股間及び臀部の皮膚は直ちに刺戟されて發赤し表皮剝脱して糜爛を呈し或は發疹を生じ甚しければ其部に化膿等を生ずることあり故に兩便の都度には必ず是等の部分をば溫湯を以て清潔に清拭し且つ亞鉛華澱粉又はジツカロールを撒布し置くべし。

第六節 初生児の榮養法(殊に母乳榮養法)

初生児榮養法を別ちて左の如くす。

- 天然榮養法(人乳榮養法)
 - 母乳榮養法
 - 乳母乳榮養法
- 人工榮養法
 - 牛乳榮養法
 - 其他の榮養法

此處には天然榮養法中殊に母乳榮養法に就き述べん。

一、母乳榮養法の利點 人乳により小児を榮養することは自然の適法にして殊に生母乳を以てすることは實に左の大なる利點を有す即ち人乳は小児榮養に最適應したる成分を有し消化吸収の度も最良好なるのみならず小児身體の將來疾病に

對する抵抗力を賦與し健全なる身體の基礎を造ること、兼ねて生母の哺乳は其生殖器の復舊作用を良好ならしむるの利益あるものなり而して我邦に在りては從來大多數の場合母乳榮養の良習慣を有せしも輒近文化進み且つ社會狀態の漸く煩雜を加ふるに從ひ歐米人に於けるが如く母乳榮養を行ふもの漸次減少するの傾向あるは吾人の憂ふる處なりとす我邦に於ける乳兒死亡率の年々増加を示すは種々の原因あるべきも母乳榮養の實行昔日に比し尠なくなりしことが其主因を爲すことは疑ふべからざる事實なりとす。

二

授乳開始の時期 附初乳の效用 初生児娩出後睡眠を取りて後覺醒し啼泣する時より始めて差開無きも通常第二日目より授乳を始む。

前述の如く母乳は産褥二三日間は初乳分泌あり、此際乳腺の緊満及び其分泌量少なきも初生児に哺乳せしむるをよしとす之れ早くより初乳分泌を催進せしむれば乳腺の機能を刺激して早くより分泌量を充分ならしむるの利あり、猶初乳は前述の如く其成分は當時の初生児榮養に最も適應する榮養品たるのみならず輕度の下劑の效能を有するものなれば之れによりて胎糞の排出を速かならしめ且つ早期よりの榮養攝取によりて初生児初期體重減少の度を尠からしむるものなり。

我邦古來の習慣として未だ一部地方にも行はれ居る初生児飲料たる「まくり」と稱する煎劑は和漢藥の一種にして輕度の下劑の作用を有し胎糞排出の目的に使用されたるが現今斯るものを特別に飲用せしむるの必要あらず之れ初乳は右の目的に榮養を兼備せるものなればなり。

三

授乳の回数 成熟兒にありては初めは晝間毎二時間半乃至三時間に一回とし夜間は出來得る限り授乳の間隔を遠くすべし、哺乳回数を規則正しくすること、殊に初生児の間に嚴守すべきこと必要にして此間に造られたる習慣は將來永續したる良習慣と成るものなればなり。

初生児虛弱なるか又は早産兒にては毎二時間或は其以内にも短縮するものとす、小兒啼泣する毎に哺乳せしむる悪習慣は絶対に廢すべし爲めに小兒の胃は常に膨滿し直ちに胃障礙を起さしめ種々の疾病を來すべし、此の如く授乳回数は初めは晝間六乃至七回、夜間は一、二回とし漸次回数を減じ從つて哺乳量を増加し遂には夜間の哺乳を成るべく全廢すべし。

四

授乳の持続時間及び分泌量の如何により一定せず、餘り長く哺乳せしむるは哺乳量を

餘り多量ならしめ且つ母體の睡眠の爲めに兒の窒息を起すの危険あるものなり、然し乍ら早産兒又は分泌少量なる場合には以上の時間より長きを要することは已むを得ず。

人乳榮養法にては人工榮養の場合と異なり、哺乳量を明瞭に計量すること困難にして通常小兒が充分に哺乳し睡眠に入る迄の持續時間によりて加減するなり。

今本邦初生児の哺乳量をば體重二七〇以上三二〇〇グラム迄の初生児百例に就き調査せし醫學博士廣瀬豊一氏及び志賀學士の成績は次の如し。

生後日數	初生児の體重平均(瓦)	一日哺乳平均量(立方仙)	一回哺乳平均量(立方仙)
分娩直後	3164.65		
第1日	3130.54		
第2日	3025.85	30.66	4.45
第3日	2952.71	120.04	17.15
第4日	2961.02	197.93	28.28
第5日	3016.10	255.76	38.54
第6日	3029.92	310.88	44.41
第7日	3062.69	353.18	50.45
第8日	3112.62	388.44	55.49
第9日	3134.92	407.07	57.30
第10日	3164.49	432.55	61.79
第11日	3202.40	443.43	63.25
第12日	3219.52	472.14	67.45
第13日	3242.79	477.05	68.15
第14日	3277.52	483.35	69.05
第15日	3313.05	479.47	68.41
第16日	3343.79	487.92	69.70
第17日	3367.23	496.40	70.91
第18日	3403.56	506.01	72.29
第19日	3420.83	506.87	72.41
第20日	3482.29	512.57	73.22
第21日	3514.63	581.42	83.06

前表に於て見るが如く初生児哺乳量は第二日目に於て少なく一回量約五瓦、一日量約三十瓦なるが第三日目よりは急に増加し生後十日迄は漸進的に増加し十日目以後は漸次増加するも其割合は少なし。

五 授乳の方法

猶上表に就て初生児體重の初期減少及び其後の増加率の一般を見ることを得べし。授乳前には褥婦の手を清潔に洗はしめ且つ乳嘴及び乳量をば微温湯又は硼酸水を以て清拭し其部に附著せる乳汁の腐敗せる物質又は塵埃等を除去したる後哺乳を始め而る後哺乳終らば再び其清拭を行ふべし。

乳房の清潔法は他面には乳嘴の損傷より起る乳腺炎なる疾病を豫防する爲めにも肝要なることなり。

褥婦授乳の位置は臥位にては側臥にて爲せしめ決して其間に睡眠せしめざる様注意すべし。

四五日後褥婦起坐を爲すに至れば其位置にて小兒を抱き哺乳せしむべし夜間の哺乳も出來得れば起坐の位置にて行ふを定全とす。

乳房は左右を交互に哺乳せしむるを良しとす若し一側にて不十分なる時は兩側を同時に哺乳せしむ。

哺乳時間僅かにして小児睡眠に陥る時は乳嘴を口腔に入れたる儘にて静かに之れを振り動かし小児を覺醒して哺乳を續くる様勉めしむべし。

乳汁分泌機能を旺ならしむる要諦は乳腺を毎回空虚になる迄哺乳せしむるにあり然る時は乳汁分泌量を愈多からしむ之れに反し哺乳量少なく乳腺内に蓄積せしむる時は乳腺の分泌細胞は漸次其機能を弱めて爲めに分泌量の減少を來すものなり世間往々乳汁分泌の寡少を訴ふることあり其原因に就きては前述せる如く種々の要素あれども哺乳初期の注意周到ならざる事が其因を爲すこと多數なれば助産婦は能く褥婦に此事を諭示するを怠るべからず殊に乳嘴又は乳量に輝裂等の創傷を生ずれば褥婦は其疼痛を忍ぶこと能はずして哺乳持續時間少なく従つて哺乳量少となり漸次分泌量をば尠からしむる場合を往々に見るなり、かかる場合は醫師に相談して適當の方法を講すべきなり。

六、離乳の時期 分娩後凡そ十ヶ月間の乳汁は小児の發育に最適したるものにして此間に漸次他の栄養品を與へて離乳せしむるをよしとす即ち小児は生後八ヶ月頃に至れば齒牙(乳齒)の發生あるものなれば最早此時期には他の栄養品を攝取し得ることを證明するものなり。

離乳の方法は母乳に代るに牛乳を以てし尙重湯等より始め漸次粥、半熟卵、ビスケット等を與へ消化状況によりて漸次常食に移行するにあり。

七、母乳の榮養不適の場合 凡そ左の場合なり。
母體の疾病としては肺結核、脚氣、精神病、急性傳染病、腎臟炎、乳腺炎、多くは一側にて哺乳し能ふ授乳中の妊娠等なり、微毒の場合は授乳せしめて却て都合良しき事あり。
月經中の授乳は小児に稍不機嫌等あるも之れを中止せず繼續せしめて可なり。

第七節 乳母の選擇

生母乳を以て榮養を行ふこと能はざる場合には先づ乳母乳榮養を選ばしむべし適當なる乳母は左の資格を有するを要す。

- 一、年齢 二十歳乃至三十歳を最良とす、餘り年若きもの又は老年のものは不適當なり。
- 二、健否 勿論身體強健なるを要するが殊に疾病の中にて厭ふべきは微毒其他の花柳病なりとす。

三分娩時期 生母と其時期異なりても差支なし然し分娩直後又は餘り時期を経過

せるもの即ち分娩後一ケ年以上のものは不適當なり。

四乳腺の發育状態 其佳良なるを要す即ち乳腺は能く乳汁を以て緊満し乳嘴には

多數の分泌孔あり且つ壓搾によりて乳汁の逆流するを要す。

五乳汁成分の良否の詳細は醫師の検定に待つべきも若し乳母が其迄哺乳せし小兒

を検査すること能はゞ其兒の榮養状態を見て一見乳汁の良否を判断することを得べき理なり。

斯くの如くして乳母を選定せば生母と同様なる攝生法を守らしむるなるが殊に注

意すべきは其食餌及び運動は今迄の習慣に従はしむべく且つ心勞は乳汁分泌を減

弱せしむる大原因を爲せば特に此點に留意せしむべし。

人工榮養法は異常榮養に關すべきものなれば下巻に於て記述すべし。

助産婦學講義 上卷(終)

大正十四年四月二十八日印刷
大正十四年五月五日發行

定價金參圓八拾錢

著者 鬼頭 英

發行者 今井甚太郎

印刷者 柴山 則常

印刷所 杏林 舎



助産婦學講義上卷

發行所 克誠堂書店

東京市本郷區本富士町二番地
(振替貯金口座東京二七九八一番)

(電話小石川七七七番)

56

214

終